

特集

福井に羽二重織を 教授した明治の偉才

高力直寛

こう りき なお ひろ

明治、大正から昭和初期まで日本の機業界で活躍した高力直寛。

「もし高力の伝記を書くとしたら、それは日本の機織史を書くことに等しい」といわれ、
斯界しがいに名を馳せ、各地に足跡を残した。

羽二重王国福井の誕生にも貢献し、福井の近代史にとって特別の位置にある。

『桐生市史』などには「わが国洋式紡織術の移入期において斯界しがいの耆宿きしゆくと仰がれた先賢」
として頁が割かれて記載されている。

本稿ではその誕生から没するまでの生涯を辿ってみる。

松山藩大手門(二階が学校教室として使用され、高力もここで学んだ)

—プロローグ—

明治20年3月初旬、22才の若者が敦賀から船に乗り今泉(河野浦)で下船、馬借街道を通り府中(武生)を経由し福井に到着した。名前は高力直寛。

この日、毛矢町の織工会社には機業家村野文次郎(組合副組合長)、県幹



高力 直寛

部の遠藤書記官をはじめとして業界、官界から要人が顔を揃え出迎えた。若い高力にもその熱い期待が伝わり、ともにあらためて責任の重さを痛感させられた瞬間であった。

高力直寛、元の名を屋代俊道といい、慶応元年5月5日羽前松山藩(山形県飽海郡松嶺(松山)町)に生まれた。

父は屋代敬兵衛、松山藩の家老を務める屋代氏の一族である。幕末における

屋代氏嫡流の当主は徳三郎であるが、幕末には幼少であったのか、庶流の敬

兵衛が屋代一族を代表して用人を務め、一時短期間ではあるが家老職にも就いて

いる。戊辰戦争にも従軍した記録が残っており、300石の家格であった。

直寛(俊道)はその敬兵衛の四男にあたる。母はせいである。敬兵衛の室



松山藩高力家屋敷跡(現在は空き地)

は若くして没したのか後室である。その出自ははっきりしないが、同じ松山藩士族出身とされている。

なお、高力は兄三人妹一人の五人兄弟であった。

◆維新の激動、桐生森山家へ◆

明治維新は庄内藩の支藩松山藩にとっても大激震で、屋代一族も試練に立たされる。そのような時代の流れのなかで、直寛は旧藩校の流れを汲む里仁館(私立中学)で勉学に励んでいたが、遠縁にあたる高力家の当主和三郎が女兒ブンを遺して没したため、養子に入り高力家を継ぐこととなる。明治13年4月、直寛(俊道)15才のときである。養子に入って間もない8月に名を俊道から直寛と改めている。

高力家の家督を継いだとはいえず、すでに士族の生活は困窮に達しており、一家の生活は直寛の背に重く押し掛かっていたことは容易に想像される。当時松山では内職として養蚕、機織が広く行われており、直寛も家計の更生の

